

## 〈解答〉

- ① 1 心のままに走り行く事  
2 イ  
3 まいりて  
4 才  
5 〔例〕 目が後ろになり、前が見えずに危なくて一歩も進めない (25字)

配点 各2点 10点満点

## 〈解説〉

- ① 「浮世物語」は、江戸時代前期に浅井了意によって書かれた、全六巻の作品。江戸時代に流行した小説の一種である「仮名草子」というジャンルのもので、平易な仮名文で書かれ、教訓的な娯楽作品として親しまれた。
- 1 傍線部①の直後の文中に、「陸に上がりては蹲ひ居り、行く時も心のままに走り行く事かなはず(＝陸に上がれば這いつくばっているばかりで、進む時も自分の思うままに走って行くことができない)」とあるのに注目する。蝦(かえる)は、自分たちが、人間のように陸上を二本足で歩いたり、思いのままに走ったりすることができないので、それができ人間を羨ましく思っていたということである。
- 2 「祈らむ」の「む」は、打ち消しの「……ない」ではなく、「……しよう」という意志や勧誘する気持ちを表す助動詞であるので、「祈らむ」は「祈ろう」と訳す。
- 3 古文に出てくる独特の仮名である「あ」「ゑ」は、ワ行の「イの段」「エの段」に相当するものであり、それぞれ「い」「え」に直す。
- 4 傍線部④を含む「あはれと思し召しけむ」は「かわいそうだと思いいになったのだろうか」という意味で、蝦(かえる)をかわいそうに思い、二本足で歩けるようにしたのは「観音」である。また、二本足で歩けるようになり、喜んで池に帰って行ったのは「蝦(かえる)」である。
- 5 傍線部⑥「祈り直しはべり(＝祈り直しました)」とあるが、具体的には、「二本足で立つて歩くのをやめて、もとのように四本足で這わせてください」と観音に祈ったということである。一度は、二本足で立つて歩きたいと望み、その願いがかなった蝦(かえる)が、もとに戻してほしいと願ったのは、「後ろ足にて立て行けば、目が後ろになりて一足も向

へ行かれず。先も見えねば危なき言ふばかりなし（〓後ろ足で立って進もうとすると、目が後ろになって一歩も正面の方向へ進めない。前も見えないため危ないことこの上ないほどであった）」という状態になって、二本足で歩くことの不便さを悟ったからである。

〔大意〕

今となつては昔のことだが、池のほとりにかえるがたくさん集まつて言うには、「すべての生き物の中で、人間ほど羨ましいものはない。私たちがかえるは、どうしてこのように命を授かり、手足を備え、水の中を泳ぐことに達者であっても、陸に上がれば這いつくばっているばかりで、進む時も自分の思うままに走って行くことができないのか。ただぴよんぴよんと跳ねるだけで素早く動くこともできない。どうにかして人間のように立って進むことができたなら、どれほどよいだろうか。さあ、（みんなで）観音に願掛けをして、二本足で立てるように（なることを）祈ろう」と言つて、観音堂にお参りをして、「どうかわれわれ（かえるの身の上）をあわれみくださり、せめて身体はかえるのままであつてよいので、人間のように二本足で立って進めるようにお世話ください」と祈つた。（観音は、）誠心誠意である（かえるの）心をかえいそうだと思ひになつたのだろうか、（かえるは）そのまま後ろ足で立ち上がった。（かえるは、）「願ひごとがかなつたのだ」と喜んで（仲間たちが暮らす）池に帰り、「それならばみんなと一緒に（二本足で）歩いてみようではないか」と言つて、陸に立ち並び、後ろ足で立って進もうとすると、目が後ろになつて一歩も正面の方向へ進めない。前も見えないため危ないことこの上ないほどであった。（そこでかえるたちは、）「これでは何の用にも立ちません。（どうか）元のように這つて進めるようにしてください」と祈り直しましたということである。